現代史部会 (2006年度歴史学研究会大会報告批判) : 足立 芳宏 戦後東ドイツ農村の「社会主義」, 田原 史起 中国農村における革命と社会主義経験

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶川, 伸一, 内山, 雅生, Kajikawa, Shinichi, Uchiyama, Masao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000229

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〈現代史部会〉

足立　芳宏　戦後東ドイツ農村の「社会主義」
田原　史起　中国農村における革命と社会主義経験

梶川伸一／内山雅生

足立報告批判

今年度の現代史部会のテーマは，「社会主義経験の脱神話化」であったが，運営委員会の意気込みにもかかわらず，結論を先取りすればこれに関する議論が積極的に展開されたかについては疑問が残る。総括的質疑でも指摘されたように，「脱神話化」の「神話化」が進行していることも事実なのだが，そもそも個々の社会主義体制の問題を「社会主義経験」と一括りにしようとするテーマ自体に無理があったように思える。まさに農民への暴力と抑圧のシステム化で始まったソ連型社会主義と，敗戦と国土の完全な荒廃の中でソ連支配によって押しつけられた東ドイツの社会主義化，抗日戦争と内戦を経て新たな国家建設で始まった中国の社会主義化はやはり同列の括りで述べられることではないであろう。したがって，運営委員会の意図とは異なり，この点では生産的議論が展開されたとも思えないが，以下で述べるようにそれぞれの報告者は旧い方法論から決別し，独自の方法で新しい「社会主義像」を提示したことに本部会の意義があったと考えられる。結局は個々の事例に関してこのような地道な研究実績の積み重ねが，「脱神話化」に結びつくのであって，その逆ではないことを銘記すべきであろう。個々の報告に簡単に触れよう。

足立氏の報告は，郡レヴェルのアーカイヴ資料を駆使した，きわめて密度の高い地域史研究である。内容の詳細はほかに譲るとして，集団化に際して「抵抗と同調」の村落の構造的相違を実に詳細に丹念に分析した労作である。ソ連における強制的集団化との比較は報告者の問題意識にはないが，評者にとって東ドイツの集団化は以下の点で，ソ連のそれとはあまりにも対照的であるとの印象を受けた。1. ソ連ではネップ期に蓄積された富裕農民の富の収奪をともなったが，東ドイツでは完全に破壊された戦後復興路線と結びつけられた，2. ソ連ではきわめて凝縮力の強い農村共同体を解体しての集団化であったが，東ドイツでは避難民が主力で元来農村のアイデンティティが弱かった，3. ソ連では集団経営から富農またはクラークといった有力農民は排除されたが，東ドイツでは経営力のある農民が中核となった，4. したがってソ連では暴力と強制力の適用が一般的であったが，東ドイツではこれらの適用がほとんどなかった。ただし，報告は1960年から始まる全面的集団化について触れず，地域的ケーススタディであることを勘案すれば，この比較が一般化できるか否かは今後の課題となろう。足立氏の報告は単に東ドイツの戦後農村の実態を具体的に提示しただけでなく，ソ連史研究と同様に，イデオロギー的束縛とアーカイヴ資料へのアクセスができなかったために，東ドイツ史でも見られた実態研究の停滞，従来のソ連型移植論や暴力的側面を強調するといった旧来の研究態勢を克服するための指針をも示している。

田原報告はある意味では足立報告との対極にある。田原氏は依然としてアーカイヴ資料にアクセスするのが不可能な状況下で，フィールドワークによる聴き取り調査で得られた知見に基づき，建国初期の中国農村社会を「原子化」と「組織化」のキーワードを用いて再整理を試みている。ここでも報告者の視点は「地域社会」の基層である村落に向けられている点で，足立報告と同様である。しかし田原氏が描く村落は具体的な土地面積や家屋を持つものではなく，地方行政に連なるネットワークの連鎖であり，その遮断された状態が「原子化」として描かれ，これを通して地域社会の変容が考察される。多くの質問もこの点に集中され，このような「社会学的」概念を歴史学的分析の手法に適用することへの戸惑いが会場にあったことは事実である。しかしながら，アーカイヴ資料を利用できない現実，聴き取り調査を通しての具体的事例に基づく概念規定とその抽象化は新たな歴史学的方法論を構築する可能性を指し示していることもまた事実である。

二つの報告を聴き，特徴的であったのは，集団化

の過程に政策論的アプローチを避け，農村の構造分析から（その手法は対極的であるとしても）アプローチを試みていることである。もちろんそのためにある種のリアリティが欠けることは否定できないが，今後の集団化研究や社会主義体制に関する研究への新しい視座を示しているように思える。その意味でそれぞれが新鮮な研究成果であった。

最後に大会の運営について一言。報告時間がかなり延長されたため（時間厳守の学会がほとんどだと思うのだけれど），討論や質疑の時間がかなり減らされたのは残念。報告内容は配付資料で分かるのだから，討論や質疑にもっと時間を割いても良かったと思える。それにしても充実感とともに疲れた1日でした。

（梶川伸一）

田原報告批判

周知のように2000年3月8日に，湖北省監利県棋盤郷の共産党書記であった李昌平氏が，当時の朱鎔基首相に「農村は実に貧しく，農民は実に苦しく，農業は実に危険な状態だ（農村真窮，農民真苦，農業真危険）」と題して提出した報告書は，経済改革を推進してきた党指導部の大きな注目を浴びた。事実，近年中国農村部で，行政当局による土地開発をめぐり，農民と地元当局との間で，大規模な衝突事件がおきるケースが相次いでいる。経済発展を続ける沿海部の都市部との経済格差に対する農民の不満が背景にあることは，中央政府も認めざるを得ない状況が続いている。2020年に「小康（ややゆとりのある）社会」の実現を目指す胡錦涛政権にとっては，まさに農村の貧窮・農民の辛苦・農業の危機という「三農問題」の解決が，緊急課題とされてきた。そのような現実は報告者田原氏に，現代中国にとってはたして革命とは何だったのか，「社会主義的経験」は何をもたらしたのかという根源的な問いかけをさせたのであろう。

田原報告では，中国革命が「工業化の進んだ強い国家を目指し，社会的資源の動員をおこなうため，民間に存在したさまざまな繋がりを『革命』によりいったん破壊し，人々の関係を『原子化』しながら，同時に農民協会，合作社，人民公社など工業化のための動員体制に沿って『組織化』を進めた」という。特に社会主義的経験以前の中国農村社会の組織化を「小さなネットワーク」ないしは「穏やかなネットワーク」と規定し，民国期に至っての変質を説明した後，共産党による上述のネットワークの遮断，つまり人々の関係の「原子化」が「地域社会のさまざまなネットワークが集中する『中心点』すなわち相対的に影響力の大きい個人のネットワークのみを重点的に破壊」して「小農化」が進行したという。さらに人民共和国建国初期の中国農村では，共産党は幾つかの大衆運動の過程で，農村社会にとっては外部要因である「工作隊」によって，コミュニティ内部の「共同財産」とメンバー間の「ネットワーク」による新たなる組織化が進行したという。

以上のような田原報告は，団塊世代の一人として，文革等目前で展開する激動の現代中国に翻弄されてきた者からすれば，隔世の感がする。人民公社に代表されるように，農民によって主体的に推進されてきたとする「社会主義建設」への呪縛の痕跡はない。その意味で田原報告は，「社会主義経験の脱神話化」に一つの可能性を示したといえよう。

ただ報告での検討対象とされた時間的空間は，人民共和国建国初期に限定されており，報告者の提起した「組織化」が進行した50年代後半，いわゆる人民公社の成立に見られる「農業の集団化」は検討対象からはずされている。したがって報告者の特徴ある主張が，もっぱら政治学的概念や社会学的タームの解説に終わり，歴史学的な検討が充分になされたとは言えず，その結果「小さなネットワーク」の実像が明確にはされていない。このことが批判の第一点である。

批判の第二点は，「原子化」の理論的展開過程が不十分な点である。今日の東アジアの政治情勢からすれば，冷戦崩壊後，経済のグローバル化に関与して各地域で情報化や都市化が進行し，従来機能していた家族や地域・職域などの人々を結びつける集団が解体し，個人が「原子化」しているといわれる。そのような不安定な状況は，若者の中に新たなナショナリズムを生成している。いわばかつての疎外論にも通ずる構造的変化のなかで「原子化」をどのように捉えなおすのか今後の課題でもある。はたして中国革命は報告者の提示したように「民間に存在

したさまざまな繋がり」を破壊しえたのか，そして繋がりを破壊された人々の関係を新たな動員体制のためだけで「組織化」しえたのかなどの疑問に関連して「原子化」をどのように捉えていくべきか，さらに以上の変動を共産党の統治の枠の中で考えてよいのか，論点として議論していく必要がある。

批判の第三点は，大会当日の岡部牧夫氏の発言にも含まれていたが，水利灌漑の問題を避けたことである。江西農村の実態については熟知していないが，華北農村では「小さなネットワーク」が社会状況の変化に対応しながら，水利をバネに「大きなネットワーク」を形成してきた。特に大河川による灌漑とは別に機能している泉や井戸等による灌漑では，報告者の言う「小さなネットワーク」が重要な役割を担っている。つまり水利から50年代後半期の集団化＝「組織化」の内実が浮かび上がってくると思われる。はたしてその集団化が「原子化」により従来の人々の繋がりと切り離されたものなのか，また「組織化」が共産党の指導の枠内での現象なのか，再検討することが求められよう。

以上感想めいた批判となったが，報告者が引き続き現代中国農村社会における組織化に対する歴史的検討を，フィールドワークでの成果を活かして積極的に試みられることを期待している。（内山雅生）